

【瞑眩（めんげん）について】

漢方診療を進めていく上では、よく瞑眩現象とよばれるものがみられます。この言葉は難しいですが、決してわかりにくいものではありません。これは、生体の治ろうとする反応のなかで、一定期間めまいや鼻出血、のぼせ感など、一見不快な反応が表われることです。

瞑眩は、薬の副作用や中毒症状とは本質的に異なるものです。もしも副作用であれば、どうなるでしょう。

患者さんが、その処方を経続的に服用することによって不快な症状は更に増悪しますが、瞑眩であれば、反応は一時的であり、そのお薬を連用することによって、初めにあらわれた不快な症状はもちろん、もともとの疾病自体が治癒に至るわけです。

確かに、患者さんに漢方薬をお出ししたごく初期にこうした反応が表われるわけですが、これを瞑眩とみるか、副作用とみるかを鑑別するには、それなりの臨床経験が必要でしょう。尚書という書物には「もしも薬を出して、瞑眩しないようであれば、疾病は治らない」と述べられていますし、江戸時代の著明な医師・吉益東洞（よしますとどう）も、「くすりの効果がある時には、かならず瞑眩があり、これは結構苦しいものである」と述べています。

漢方の教科書・傷寒論の中では、瞑眩はこう書かれています。

「麻黄湯（まおうとう）服薬後、熱感を覚え、苦しみ、めまいを訴えることがある。また激しい場合には鼻出血を起こして治癒することがある。いずれも薬の反応の為で、治癒に向かう経過であられる症候である。」

「胸脇苦満のみを目標として柴胡剤（さいこざい）を与えてよろしい。もし、大黄（だいおう）などで下した後、まだ柴胡の証があれば更に柴胡を与えてよろしい。この場合、薬を服用したためにかえって発熱し、汗が出て治る、これは瞑眩である。」

こうした例は、小青龍湯（しょうせいりゅうとう）により子宮出血があったが、その後長く患っていた気管支喘息が治癒したとか、生姜瀉心湯（しょうきょうしゃしんとう）によってはげしい嘔吐を来したが、その後消化器症状全般が改善した。また重症の妊娠悪阻に対し、半夏厚朴湯を処方したところ、服薬後これも激しい嘔吐をしたが、しばらくすると鎮り、一ヶ月近く殆んど食べられなかった病人が喜んで食事ができるようになった、など、例をあげると枚挙にいとまがありません。私のところでも、大建中湯（だいけんちゅうとう）服用後めまいと胸苦しきの症状が起こったが、次第に楽になり、過敏腸症状が知らぬ間になくなったという経験があります。

なぜこういった現象が起こるのか、これは薬物代謝の研究成果に期待するところ大ですね。経験的に、こうした反応は多くの漢方医の知るところです。ですから、「あの薬飲んだら、余計に悪くなった」ということで、パッとお薬を止めてしまうのではなく、なぜそうなるのか、そのまま飲み続けるべきなのかどうかを主治医にじっくり話を聞いて下さい。